東京大学大学院工学系研究科教授 ― 元橋一之さん

技術を生かす 経営のあり方探る

さまざまな製品分野において高い技術力で世界をリードしてきた日本だが、今や急速に国際競争力を失いつつある。「日本企業の優れた技術をいかに経営に生かすか」。こうしたテーマに挑んでいるのが、東京大学の元橋一之教授だ。「技術経営」と呼ばれる学問分野で研究や教育活動に精力的に取り組んでいる。中国やインドなど海外にもしばしば出張し、企業訪問や講演に忙しく飛び回る。

「日本の企業は技術的には優れているが、国内だけで技術を生かした経営を進めていくことは難しい。技術をグローバルビジネスにつなげていける技術経営のあり方の研究に注力している」と元橋教授は語る。研究テーマは、生産性による日本の国際競争力の分析や、IT（情報技術）や製薬産業などハイテク分野のイノベーションシステム、知的財産など多岐にわたる。

教育活動では、東大の外国人留学生向け大学院修士課程「国際技術経営プログラム」の責任者を務める。10月から英語での授業を開始し、アジアだけでなく欧米からの留学生拡大にも期待を寄せる。将来、日本企業で技術経営の中核を担えるような人材の育成を目指している。

技術経営のあり方を今後大きく変える可能性のある技術として、元橋教授は「クラウドコンピューティング」を挙げる。自前でコンピューターやソフトウエアなどのIT資産を持たず、インターネットで接続された外部のITシステムを活用するクラウドの導入にはさまざまな利点がある。効率性の向上やコスト削減に加えて、急激な事業環境の変化や技術の進化にも柔軟に対応することも可能だ。

クラウド活用の動きは拡大へ

「厳しい経済環境の中、特にIT予算の限られた中小企業や大きな成長が見込めるベンチャー企業にとって、クラウド導入のメリットは大きい。大企業も激しい国際競争を勝ち抜くには、クラウドを活用した効率的で低コストの情報システム構築が不可欠になるだろう。今後、成功事例が増えていけば、一気にクラウド導入が加速し、日本の産業を活性化させる起爆剤になるのではないか」と分析する。

「技術経営は学際的な学問分野であり、研究領域は広がっている」というが、その中で元橋教授が現在焦点を当てているのが、イノベーションのオープン化とグローバル化だ。「経済的、社会的にインパクトを与える実用的で本格的な実証研究に取り組み、教育や提言を通じて成果を世の中に還元していきたい」

【もとはし・かずゆき】
1961年大阪府生まれ。84年東京大学工学部卒業。86年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了後、通商産業省入省。93年コーネル大学経営大学院修了（MBA）。2000年慶応大学大学院博士（商学）取得。02年から一橋大学イノベーション研究センター、04年から東京大学先端科学技術研究センター勤務を経て、06年から現職。